

医学史を紐解く —近代の先駆者たち 2

尼子 富士郎 (あまこ ふじろう)

日本の老年医学の開拓者

明治26(1893)年、山口県下松市に生まれ、1918年に東京帝国大学を卒業、稲田内科(現・第三内科)に入局し、26年からは日本初の本格的な老人施設「浴風園」の医長に就任。浴風会病院の発足に伴い初代の院長を務めた。一方で『医学中央雑誌』の編集・発行に携わった。



明治26年(1893)

昭和47年(1972)

父の友人、夏目漱石が 英語をレッスン

尼子富士郎は1893(明治26)年、尼子四郎の長男として山口県下松市に生まれた。父の四郎は広島医学校出身で、富士郎の誕生からそれほど間を置かずに上京、生命保険会社の診察医を経て1903年には千駄木に尼子医院を開業し、ほぼ時を同じくして日本初の医学文献抄録誌『医学中央雑誌』を創刊した。隣人の夏目漱石との親交が深く、ユーモア小説『吾輩は猫である』の登場人物、甘木先生のモデルとも目される。実際に、富士郎も東京高等師範附属中学校の受験に臨み、漱石から英語の個人教授を受けたといわれる。

1918年に東京帝国大学医学部を卒業、ワイル(レプトスピラ)病の病原体スピロヘータの発見で名をはせた稲田竜吉教授率いる内科(現・第三内科)に入局した。この5年後の9月1日、相模湾北西部を震源とするマグニチュード7.9の巨大地震が首都圏を襲う。関東大震災がそれで、死者・行方不明者14万人以上、負傷者10万人以上、避難者19万人以上に及ぶこの未曾有の災害は、彼の人生にも大きな転機をもたらすことになった。

被災者のうち身寄りのない老人たちを仮設の宿泊所や寺院などに収容した内務省は1925年、皇室からの救援金と一般の義捐金を基金に財団法人浴風会を設立し、2年後には杉並区高井戸で救護用の施設の建設に取りかかった。

当初の定員は500人、建物のプランの作成は東京大学安田講堂の設計で有名なコンクリート建築のエキスパート、内田祥三に委ねられた。こうし

て「国内老人施設の規範を示し、収容者の処遇に最善を尽くす」との理念の下、礼拝堂のほか100床のベッドを擁する施設が落成を見る。翌1926年、医局長の任にあった富士郎は、稲田教授の勧めでこの施設—浴風園の医長となった。

手探り状態からの研究と 医学誌の編集にまい進

収容者全員が60歳以上、しかも6割方はなんらかの病を抱えている。他方、老化がもたらす疾患、その症状、診断、治療を扱う老年医学はいまだ輪郭すら定かではない。診療から剖検までを率先してこなすうち、浴風園は養老院の枠を超え、研究

機関の様相を帯びていく。

なおかつ1928年以降は、体調を崩した父から『医学中央雑誌』の代表を継承、医学にとどまらず、歯学、薬学、獣医学といった関連分野の雑誌の購入、論文の審査と取捨選択、科目別分類、編集、校正のすべてを独力で取り仕切るようになる。年報とはいうものの、本来の仕事のほか、嘱託講師の形で籍を置く東京大学での講義、研究論文の作成を抱えながらの作業は生涯にわたって続いた。

戦中の物資不足、戦後の財政難に耐え、日本の復興が本格化した1951年には日本医学会で「老年者の生理病理の臨床」と題し、他に先んじて導入した脳卒中患者のリハビリテーションの意義を説き、一躍注目を集めた。60年には浴風会病院の改編に伴い初代の院長に就任、老人医学の確立に向けた活動は海外にも知られるようになる。

また、月刊の『浴風園調査研究紀要』には1930年の創刊時から編集と執筆に携わり、67年に掲載した「老年医学の歴史」、70～71年の「比較老化学—植物部門における老化」、「比較老化学—動物部門における老化」の三部作は没後、『老化』として書籍化されている。71年に名誉院長に退いた富士郎は翌年、多発性骨髄腫を患い、世を去った。享年78。新しい領域の開拓者として、あるいは抄録誌の発行人として多忙な日常を送りはしたが、その人生は仕事一辺倒というわけでもない。音楽家や画家を友とし、囲碁や観劇を楽しむ趣味人であり、ゴルフや乗馬をたしなむダンディーなスポーツマンでもあった。

(執筆：順天堂大学名誉教授・酒井シヅ)

(全6回。毎月第4週号に掲載)